

栃木県総合計画懇談会等における各委員の御意見

H22. 10. 29

項 目	委員の御意見
<p>【計画全般】</p>	<p>○県の総合計画と市町村振興計画との整合を図るべきである。</p> <p>○内容はこのとおりでと思うが、県民に分かりにくい。何が課題でどうしていくのか、県民と話し合う場が多くあれば良い。</p> <p>○今の「とちぎ元気プラン」は厚くて読む気がしない。もう少し具体的でないとなんかしたいのかが分からない。</p> <p>○財政健全化の課題への対応が記載されていない。</p> <p>○計画の県民に対する広報手段の検討が必要である。</p> <p>○計画の大小、量に関わらず、読む人は読む、読まない人は読まないの、全県民が目にすることを前提にする必要はない。市町の職員が整合性を取りながら、施策を進められるような計画が良い。</p> <p>○今までのように総論が短く各論が長くなっている形ではなく、将来像を明確にし、新たな計画のつくり方を考えた方が良い。</p> <p>○財政的な課題も重要である。県民が暮らしやすい県にしたいのか、財政を改善したいのか。歳出を抑えるのか、歳入を増やすのかという大きな目的を決めないと改善されない。</p> <p>○次期計画は、単純に歳出削減か歳入増加かということのみを議論して策定するものではない。県民ニーズと財政運営の両立というジレンマがある。</p> <p>○県と県民の協働でそれぞれの役割を果たすことを明確に打ち出し、理念に据え、今後5年間の財政状況の基本をどう押さえて計画していくかが大切。</p> <p>○次期計画については、財政問題は余り考えず、各団体や県民の夢を盛り込んで欲しい。</p> <p>○財政が厳しい時に、心の豊かさを実感できるようにするためには、一人ひとりの幸せをきめ細かく見られる行政が必要だ。</p> <p>○県民に見てもらえる、親しんでもらえるような冊子に仕上げたい。</p> <p>○県議会の検討会では、次期計画は大きく見直すべき、網羅的なもの、また、どこの県でも同じようなものではなく、本県はこれをしていくなどの戦略的な計画であるべき、さらに、目指すべき将来像を明確にし、それを強く打ち出すべきなどの意見をまとめた。</p>
<p>【第1次素案】 第1部 第1章 第1節 時代の潮流と “とちぎ”の課題 (全体)</p> <p>1 人口減少・少子高齢化</p> <p>2 地域経済と産業構造の変化</p>	<p>○トピック（囲み部分）は、象徴的な実例など、栃木県の実情をできるだけ分かりやすく紹介するのが良い。</p> <p>○「人口減少・少子高齢化」では、2015年には単独世帯の割合が1位になるような見込みなども重要である。</p> <p>○平成20年以降の世界同時不況により本県製造業が受けたダメージについて、この中にあまり記載されていない。5か年の総合計画に、製造業のある種の衰退をどのように取り上げ、どう対処するのか。特に法人関係税の減収も含めて教えて欲しい。</p>

項 目	委員の御意見
<p>3 地域社会・コミュニティの変化</p> <p>4 グローバル化の進展</p> <p>8 地方分権時代の到来</p>	<p>○私の実感では、地域活動は衰退しつつあると思う。社会に貢献したいという気持ちはあるが、実際にはできないという人が多い。</p> <p>○ここでは地域社会の括りをどう捉えているのか。自治会レベルなら市町村の役割であり、県の関わりが分かりにくいので整理が必要である。</p> <p>○外資系企業の誘致促進とあるが、むしろ地域産業の振興に重点を置くべきと考える。</p> <p>○道州制を見据えて、栃木県のあり方や、県内の市町村合併も含めた市町村のあり方も今後の計画に載せていかなければならない。</p> <p>○県は、立場の違う市町村間の調整をしっかりと図り、県民一人ひとりの幸せにきめ細かく対応していくことが求められている。</p> <p>○地方分権について、方法論を含めもう少し突っ込んだ記載が必要である。</p>
<p>第2節 “とちぎ”の可能性と潜在力 (全体)</p> <p>2 恵まれた立地条件</p> <p>7 次代を創る豊かな人材</p> <p>8 “とちぎ”の総合力</p>	<p>○地域の特色を発揮して“とちぎ”づくりを進めていくなどの内容も加えた方が良い。</p> <p>○50、100、150kmのコンパスの中心が東京になっているが、栃木を中心にする発想が必要である。</p> <p>○「次代を創る豊かな人材」の項目に、「コミュニティ」の内容（言葉）も書き込んだほうが良いのではないかと。</p> <p>○「次代を創る豊かな人材」について、東京等に進学した学生等、本県で育成した人材が流出していることに不安を感じている。若者が戻ってこないのであれば、リタイヤした方々を呼び込むことも考える必要がある。</p> <p>○栃木県は全国的にはとても影が薄い。もう少し対外的に上手に情報発信していくことが必要である。</p> <p>○“とちぎ”だからできることをどんどんやって、“とちぎ”という名前が前面に出るような活動を、市民レベルでやっていくべきである。</p> <p>○栃木の総合力を外に発信するとしているが、具体的にどう発信していくのか。8割の県民が何かをしたいと思っているので、まずはこんなことでもいいんだというような、県民が協働できる大きな装置づくりを県が行って動き出して欲しい。</p>
<p>第2章 第1節 “とちぎ”の将来像</p>	<p>○“とちぎ”をどのような方向に持っていくのか、どういう“とちぎ”が良い“とちぎ”なのか、方向性を打ち出して欲しい。</p> <p>○これからは、どういう県を作っていくべきか、どういう将来像を描き、それにどう向かっていくべきか、我が県の良いところはこのようなところがあり、それをこういう風に伸ばしていこうということを明確にしなければならない。</p>

項 目	委員の御意見
<p>第2節 “とちぎ” の将来像の実現に向けて</p> <p>1 “とちぎ” づくりの基本姿勢</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなが一致団結する気持ちを持つことができれば、それぞれの立場で何か作り上げられる。 ○実際の協働は、市町村の中で、それぞれの特性に応じて行われている。県はそれをバックアップするという考え方を打ち出すべき。 ○県民が、時間ができて何かをやりようという時に、飛びつける場が常にどこかにある “とちぎ” にしたい。 ○協働をどのように進めていくかがポイント。CSRなど上手に活用することが必要である。 ○「とちぎ元気プラン」から「協働」という言葉が溢れているが、県民がそれを肌で感じられていない。県民全体が理解できる方法を考えて欲しい。 ○「新たな時代の“公（おおやけ）”を実現する」という言葉が分かりづらい。「とちぎ元気プラン」の「新たな公を拓く」という言葉も分かりづらかった。「とちぎ元気プラン」での協働の成果はどうなっていて、次期計画ではどうしていくのか。 ○「自立」という考え方が全体を貫いている印象を受けるが、更に一步、「誰かのために役立つ」という部分に踏み込むべき。 ○安全・安心の確保が求められている背景には、人と人とのつながりの希薄化がある。そのような中、83%の県民がよりよい “とちぎ” づくりに向けて何かしたいと思っていることは重要。この大きな力を実際の行動に結び付けるため、県として地域をコーディネートして欲しい。 ○「県民一人ひとりが主役となる “とちぎ”」は「県民が主役となる “とちぎ”」の方が良い。選択と集中を図るには、多様な意見を折り合わせる必要があると、この観点からすると、「一人ひとりが主役となる」という表現は強すぎるのではないかと。 ○何かをやりようとする市民・県民が学ぶきっかけとして、行政が、市民にどんどん悩みをぶつけてもらえるような活動をして欲しい。 ○より良い “とちぎ” づくりに向けた参加意向を持っている県民が、具体的に県を良くするよう行動できる装置を考えるべき。 ○県民との協働に力を入れていることは承知しているが、具体的にどのような対応をして良いのかが分からない人も多いため、実際的な取組等を紹介して欲しい。 ○「多様な主体とのパートナーシップ」をとる以前に、それぞれの団体等が協力し合えるよう、行政が間に入り、コーディネートをして欲しい。
<p>2 “とちぎ” づくりの基本方向</p> <p>(1) 政策推進の基本</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○地域住民が安全に明るく生きていくことのできる社会をつくるため、あまりお金をかけずに、心の問題を重点に取り組んでいくべき。 ○「心の教育の推進」や「安心して子どもを産み育てることができる環境づくり」、「高齢者の自立支援と生きがいづくりの推進」は、すべて根っこが共通している。家族や近隣の助け合いなど、心の問題と、自分のことをきちんと自分でやれるということである。 ○いろいろな部分で福祉が最後の受け皿であると思う。マンパワーで栃木県をどう変えていくか。 ○私は “とちぎ” が大好きだが、“とちぎ” が大好きになる家庭教育や、県民意識の向上ということが大事だ。

項 目	委員の御意見
(2) 政策推進に当たっ ての視点	<p>○私も“とちぎ”が大好きであり、これを大人が発信していくことが大切。親は“とちぎ”が大好きだと子どもたちに発信しているのだろうか。</p> <p>○「政策推進に当たっての視点」については、それぞれをどう結びつけるかが重要であり、視点を横につなぐのが総合計画の役目であろう。</p> <p>○行財政資源を有効に活用するためには、1つの施策で多岐にわたる分野で効果が出るような施策を考えるべきである。</p> <p>○「現状分析を受けて、これからどうする」という視点が重要である。従来の総合計画の時代とは問題意識を変えていく必要がある。</p> <p>○選択と集中については、どの分野のどこを削るのが無いと分かりづらい。</p> <p>○「政策推進に当たっての視点」方法論として、政策の相乗性・相互作用を考えて欲しい。この不況下、失業、就業できない若者に、福祉や林業の職場で、ボランティア的指導を含め仕事をさせる。言い換えれば失業対策・職業訓練・環境問題を複合作用を持つようなやり方を考えて欲しい。</p> <p>○人口減少・高齢化と安全・安心や環境の問題は相互に関係している。総合的に議論していく必要がある。</p> <p>○「高齢化」の視点として、①高齢化による課題を行政としてどう解決するかという面と、②高齢化を受け入れ、高齢者を上手に活用するという見方がある。特に、②は、栃木は東京に近く、災害も少ない、高齢者が活躍している農業も盛んなど、高齢者を受け入れる体制が整っているで、高齢化を積極的にとらえた施策をうまく打ち出していくと良い。</p>
① 安全・安心の確保	<p>○「安心して子どもを生み育てることができる地域づくり」は重要である。課題は、医療が充実していない、地域コミュニティが崩壊している、まちに活気がないこと。</p> <p>○様々なことが進歩・進展する中で、子どもたちの健康障害や発達障害は増加の一途をたどっている。</p> <p>○私が勤めている医療現場では、医療スタッフが慢性的な人員不足の状況である。</p> <p>○県と市民ボランティアが手を携えて地域の高齢者を支えてきた。栃木県は小規模・中規模多機能の福祉において全国の先進県である。</p> <p>○「安心で良質な医療の確保」であるが、医療現場は医療関係者の犠牲の上に成り立っているような状況である。</p> <p>○県内でも医療の格差があり、開業医が高齢化したり開業医が少ないなど、医療を提供される住民に不便なところがある。</p> <p>○社会のセーフティネット、子育て環境の整備、保健・医療・福祉の分野は、もっと積極的に提言しても良いのではないかと。</p> <p>○「暮らしやすい」ということが一番だと思うので、「みんなが安心して暮らせる栃木県」といったものを、見つけていけたらいい。</p> <p>○「安全・安心の確保」に、医療や福祉の表現も加えた方が良い。(防犯だけのイメージになってしまう。)</p> <p>○地域医療が大変な状況にある中、患者が病気について勉強する姿勢が必要である。失業者を福祉の仕事に回す動きがあるが、製造業に従事していた人が介護の仕事をするのは簡単なことではない。若い人の中には、</p>

項 目	委員の御意見
<p>② 活力の創出</p>	<p>人とのコミュニケーションが苦手な人が多い。顔の見える付き合い方について勉強する必要がある。</p> <p>○「安全・安心の確保」の概念はかなり幅広いと思うが、全てを網羅することは不可能であり、県として、重点化を図るものと、状況に応じて柔軟に対応するものを考える必要がある。</p> <p>○地域医療の再生には、住民側の協力も必要である。また、病院も、専門家だけでなく、住民の意見を受容する姿勢を持って欲しい。</p> <p>○福祉の職場は、不況時に安定するという悲しい状況にある。国では、失業者に福祉の現場への就業を進めているが、介護の職は専門職としての専門性、自らの選択としての職業であるべきで、決して失った職の代替で存在するものではない。今後は地元とのつながりが重要であり、施設内で完結する福祉から、地域に開かれた福祉・医療が求められている。</p> <p>○近くの人にだめだと言われても、県内のどこか遠くの人に相談すると、これはこういうことだと教われる多層的なコミュニティの復活を考える。</p> <p>○県外に進学した若者が帰って来ないという他県の記事を読んだが、本県も同じ状況にあると思う。栃木県内の企業の見直しも重要だ。</p> <p>○少子化の中でどんどん東京圏に進学してしまった場合、県内の私立大学が生き残れるのか、心配だ。</p> <p>○「活力の創出」に、雇用の表現も加えてはどうか。また、文化・芸術も活力の創出につながるものである。</p> <p>○域内の交流連携、域外の広域交流連携をどうやっていくかが重要である。再生産力が破壊された中、その地区地区でどうやっていくか。全体のトーンは従来の成長パターンの延長に思える。大きく転換を図れるかどうか難しいと思うが、5年後の姿をイメージしそこから逆算してみるのはいかがでしょうか。</p> <p>○栃木県ならではの新産業、大企業に依存しない独自の技術開発という大きな視野に立った政策が必要。極論すると「オンリーワン県」という方向性を示して欲しい。総論的には良くできたプランである。海外の人も含め栃木県に目を向けてもらえるような産業づくりを、産学官連携のもと進めて欲しい。</p> <p>○企業も県も基本は人づくりである。この人づくりを分かりやすく書き込めないか。また、栃木県に優秀な若い人を集める、育成した若い人を在住させることが大切である。</p> <p>○米麦が弱くなっている。ブランド化の推進を含めた直売所の取組や日本型食生活の推進に力を入れて欲しい。</p> <p>○木の良さを活かした住宅産業、流通の検討を進めて欲しい。また、次世代の団体育成も視野に入れて欲しい。</p> <p>○本県は観光資源に恵まれているが、人口減少の中、これから必要なのはインバウンドである。どこの県もインバウンドに一生懸命であり、世界に目を向けた観光をやっていく必要がある。</p> <p>○これまでの産業集積・技術集積をどう残し、どう活かすのか考える必要がある。</p>

項 目	委員の御意見
<p>3 “とちぎ” 地域づくりビジョン (1)地域づくりの基本方向</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○「地域づくりの基本方向」に市町村との連携や県民との協働の記載も加えた方がよいのではないか。 ○買い物難民と呼ばれる人がいる。例えば、デリバリーのお届けサービスを中心とした販売の仕方、牛乳配達の見直しなど、人と人がつながることを一つの仕事として、コミュニティビジネスという括りになるかもしれないが、ミクロで積み上げ、暮らしやすさ・安心ということを県が大きく網をかける、地域で隙間的な部分を仕事としてやっていくということもある。 ○県内市町村の間にも格差が生じている。地域（の状況）別の地域振興のあり方も考える時代になってきている。人口減少を前提とするなど、今までと全く違った書き方を求めてもよいのではないか。
<p>【第2次素案に向けて】 第2部 “とちぎ” づくり戦略 (全体)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○多方面からいろいろな要望が集まっているが、計画の策定に当たっては、総花的にならないように、やること、やらないことの議論が必要である。部会を進めていく上でも留意すべきである。 ○「“とちぎ”の可能性」はまさに栃木県のことだが、例えば人口減少とか少子高齢化は栃木県だけの問題ではない。この中で栃木県として何をするのかという具体的なものが、栃木県だけの差別化として出てくる戦略なのかどうか。グローバル化や高度情報化の進展なども同じで、例えば高度情報化について栃木県だけが一つのアドバンテージをつくりたいのであれば、栃木県だけの何らかの投資をするのか。 ○「“とちぎ”を創る」では、「私たちが目指すのは、一人ひとりが真に輝き、誰もが安心して暮らせ、次世代へと環境を守り伝え」ということであるが、他県の人が栃木県に住みたい、栃木県に行って創業してみたいというものが将来のビジョンとしてないと。現状を維持する、現状を守るというのは分かるが、成長戦略はそういうものではないと思う。 ○選択と集中ということであれば、切り捨てなければならないものがあると思う。それをどのような基準で考えていくのか。我々が努力して変化できるものに我々の努力は集中しなければならない。中小企業や栃木県で創業する人を強くする方法はないだろうか。弱者優先の時代だとすれば、弱者を救うための強者がいなければならない。例えば、中小企業を育てないと税収も上がらない。そういう企業が成長するというところに目線を合わせていないと感じる。強者になる企業をどう成長させるかということ議論の中に入れてほしい。 ○人口の問題であるが、自然減は全国的な動向で、それは栃木県だけの問題ではない。一方で、社会減について言えば、何らかの手を打てば増に転じることができるのではないか。ここに掲げている柱自体は全体を網羅していると思うので、その中で全国の動向として踏まえるべきものと、栃木として実際に手をつければ可能性のあるものを部会で議論すべき。 ○気になったところは、「“とちぎ”づくり戦略」の「戦略」という言葉である。「計画」だと甘いので、確たる考え方をもちたいということで「戦略」を使ったのだと思うが、大きな総合計画の骨格となるものを伝えていこうということであれば、方法論のような感じを受ける「戦略」という言葉は違う、変えられないか。 ○印象であるが、今日の全体論で言っていることと、実際の現場とのギャップは大変なものがある。県民と一口に言っても多様であるが、我々の

項 目	委員の御意見
	<p>存在は、県民の方々と今日検討した言葉をつなぐような役割があると思う。そういう意味で、部会が勝負ではないかと思った。</p> <p>○ 計画には、基本的なプロジェクトのイメージまでで、それぞれの事業に関しては列記しない形と従来型の事業まで全部入れる形の2つがあるが、今回選択した形で、今後、プロジェクトを構築する中で実行性や実現性があるのか。</p> <p>○ 「とちぎ未来開拓プログラム」の基本的な考え方は次期計画に盛り込まれていくと聞いていたが、このような選択と集中の考え方をすることになると、果たしてきっちり反映されていくのか。</p> <p>○ 分権に関しては、「時代の潮流」における「地方分権時代の到来」の中で現状を説明しているが、第2部で議論していくのか。</p>
<p>第1章 政策の基本 「人づくり」</p>	<p>○ ライフステージの表について、「子ども→若者→子育て世代→大人→シルバー世代」の矢印をたどると、子育て世代が大人になれないように見えるので、子育て世代も大人に入れて書いて欲しい。</p> <p>○ ライフステージを「子ども」からそれぞれ「シルバー世代」まで分けた意味はよく分かる。学校教育を含めて子どもたちをはぐくむ、人材育成するということもよく分かるが、子育て世代以降については、社会参画すら厳しい時代の中で、その意識を果たして持っているかどうか。「活かす」という表現についても違和感があり、まだ「活かす」の前段のレベルまでしか到達していないと思う。</p> <p>○ 「人づくり」の考え方や取組等については、具体的なイメージが分かりにくい。単に子どもの教育だけではなく、生涯学習もあり、子育て支援の環境づくりや大人のキャリアアップのためのいろいろな施策、シルバー世代が生き生きと社会に参画できる仕組みなど、大きな括りで考えていった方が良くと思う。そのあたりは、部会で議論いただければありがたい。</p> <p>○ 政策の基本が人づくりというのはもっともなことで、一番大切だと思う。</p> <p>○ 子育て世代の保護者は、保育園や子どもたちを育てる場に預ければいいと、自分たちで何かしようという意識が薄い。自分たちの子どもや社会は自分たちでつくっていかなければならないという意識を植えつける教育の仕方も考えて欲しい。そういう親学習のプログラムの要望もかなりある。</p>
<p>第2章 重点戦略 (全体)</p>	<p>○ 部局横断のプロジェクトを立ち上げることも一つであるが、今ある計画等を精査していくことも大切ではないかと思う。</p> <p>○ 選択と集中というが、何をもとにしての選択と集中なのか。県が将来像をより明確にし、それをもとにして各部会で話し合っ、県民が受け身ではなく主体的になれるような総合計画をつくっていききたい。</p> <p>○ 細かく施策まで落として調整するのであれば理解しやすいが、プロジェクトという単位で抽象化した場合、今後どのように部会の中で検討していくのか難しい。この点については各部会長が苦勞すると思うので、部会長連絡会議のようなものをつくってはどうか。</p> <p>○ 計画の中に、「人づくり」、「環境」という問題があるが、新たな視点ということで、医療問題や将来の社会保障費削減も視野に入れて、予防医学にも目を向けていってはどうかと思った。</p>

項 目	委員の御意見
(安心戦略)	<p>○人と人、企業と企業、いろいろなつながりの中で栃木県民が生活している。その中で、安全・安心というのは人として生活する上での基本だと思う。人と人とのつながりは、計画だけをつなげるのではなく、そこに関わる人たちも計画の意味をよく理解した上で実行していかなければならないし、県民にもこういう計画だと分かりやすく伝えていく必要がある。</p> <p>○職場だけではなく、地域でのコミュニケーション、広がりをつくっていかなければならない。働きながら子育てをする女性に関する課題は、地域におけるサポートである。そういう環境をつくるためには、栃木県としてはこういう将来像を目指すのだということを明確にしていかなければならない。キーワードは「地域」である。</p> <p>○現実に我々が今経験している地域医療の崩壊、医師不足といったテーマにしても、やはり実現性のある計画が必要である。「県民の目線」「国民の目線」という言葉をよく使うが、その「目線」というものを真摯にとらえて考えていくべきではないか。</p> <p>○「暮らしを支える安心戦略」ということで、一番大事なものは食だと思う。一口に地産地消といっても、安心・安全な農畜産物を生産していることをどう地域の人に理解してもらうかが課題である。</p>
(成長戦略)	<p>○これだけ産業の先が見えないと、柱の1つに産業育成があるべき。</p> <p>○日本は、重化学工業を機軸にした工業社会から、知識産業やサービス産業を機軸とする知識社会へ転換しかかっている。重化学工業に合うような「人づくり」を一生懸命やっても、マッチングしなくなってしまう。誰でも、いつでも、どこでも、できればただで、人間的な能力を生涯にわたって持ち続けるインフラをどうつくっていくのかが重要。これから舵を切っていく知識社会に対して、どう考えていくかを将来像の中でもっと明らかにしていっての方が良い。</p> <p>○企業がしっかりしていないと雇用も賃金も含めて生活の安定、安心につながらない。人口は職を求めて移動するというように、職がないと県の人口も減少傾向になってしまう。合計特殊出生率は沖縄県がトップで、次が青森か秋田かと。これから部会でさまざまな意見が出ると思うが、ぜひ数値目標をお願いしたい。例えば今、県内の失業者が何人いてそれを何人にする、グリーンジョブにかかわる雇用創出でどのくらいなど。</p>
<p>【その他】 県民アンケート調査について</p>	<p>○企業経営者や企業人を対象としたアンケートがない。地場の企業の成長を考えなければいけないと思うので、そういったところの意見が必要である。</p> <p>○「県民と行政の役割分担のあり方」について、県民のために住みやすい県をつくるというようなアンケートにすると、行政依存型になってしまう。</p> <p>○特定分野に対するアンケート調査をすれば、もう少し違った結果が出たのではないか。</p>